

# 環境・開発と世界史

## —「ヒューマニズム」の捉え直しを通して—

深 草 正 博

**要旨：**環境の観点から世界史を考える際に、地元の伊勢神宮の式年遷宮はひとつの手がかりとなる。特に深夜に執り行われる遷御は、闇のもつ深い意味を考えさせてくれるとともに、近代とはこの闇を葬り去ろうとした時代ではなかったか、とも想定させてくれる。さらに遷宮が20年おきに行われていることも深い意味があるように思われる。

ところで、ルネサンスの本質はヒューマニズムにあるとされる。これまでの世界史では、このヒューマニズムは、中世の神に束縛された人々の人間性が解放されたものとして、非常に高く評価され、近代の意識に直接つながるものとされた。だが、視点を変えれば、これはきわめて強力な人間中心主義であり、自然を征服するという思考を内包している。ハイデッガーは、ヒューマニズムの持つこのような特質を厳しく批判し、本来の人間のあり方に戻ることを提唱する。しかし、このハイデッガーの思想にも、ヒューマニズムを根底に持つキリスト教があり、十分な批判にはなっていないのではないか。キリストの光→ヒューマニズム→啓蒙思想→「開発」という流れが、ヨーロッパにおいて森林破壊を激しくさせたと考えられる。

本稿ではこうした流れからの脱却をはかるために、ヒューマニズムやハイデッガーの思想の検討はもとより、アニミズムや時間感覚にも目を向けて、今後の自然環境保全のための方策を考える。

**キーワード：**開発、ヒューマニズム、ハイデッガー、啓蒙思想、アニミズム、時間感覚

### はじめに —私の住む伊勢の遷宮から考える—

伊勢神宮では、20年ごとに式年遷宮を行っている。これは持統天皇の朱鳥4年すなわち西暦690年に始まり、以来、戦国時代に120年以上の中断はあるものの、今日まで1300年以上も続く、世界史上希有な儀式である。平成25（2013）年が第62回の式年遷宮で、約1450万人の参拝者があった。

テーマとの関連で言えば、この式年遷宮から世界史に関わって、何を学ぶことができるのであろうか。この遷宮に実際に私が関わったことで、3点の問題提起をしてみたい。

当時、私が皇學館大学の教育学部長をしていたことから、普通では決して経験できないことをさせていただいた。すなわち式年遷宮の中核をなすのは遷御（せんぎょ）といって、闇の中で本宮から新宮へと神をお移しする儀式であるが、その際私は外宮の御正殿のすぐ近くで、潔斎して装束を

つけ、鉄製の鍋の上で火を焚く役をやらせていただいたのである。火をつける前の闇の中でじっとし、星明かりのみがあり、その静寂さの中で、神官たちが玉砂利の上を歩くときの音に耳をそばだてながら、闇の持つ意味を考えることができた。そして、近代とはこの闇を葬ろうとした時代ではなかったか。「啓蒙思想」とはまさにこの闇を取っ払おうとした思想ではなかったか、と思ったのである。確かに啓蒙とは英語で enlightenment で、暗闇の中に明かりを照らすということであろう。ということは、それは暗い森を切り開くということも意味し、森林破壊をも内包する思想ではないであろうか。しかし、啓蒙思想が葬り去ろうとした闇は重要な意味も持っていないであろうか、という問題提起をここではしておきたい。

次に、時間感覚である。最初に述べた遷宮の20年とはどのような意味を持つのであろうか。実にいろいろな意見がある。社殿の耐久限度とする

説、宮大工の技術継承のためとする説、あるいは、時代生命の更新とする説、さらには古代の稲の貯蔵年限とする説などである<sup>(1)</sup>。私は20という数字にあまりこだわらず、時間が20年ごとに戻ってくるという円環的時間の感覚こそを主張したいのである。これは時間が直線的に流れるという、ユダヤ・キリスト教的感覚とはいちじるしく異なるものであろう。日本文化の中核である伊勢神宮が、円環的時間であることに非常な興味を持つのである。

第3に、神宮の御正殿の構造と素材についてである。この建物の最も大きな特徴は、その両脇で建物を支える棟持柱（むなもちばしら）で、弥生時代にその起源を持つものである。20年を経て新たな遷宮の時、解体された御正殿の棟持柱はどうかといえ、外宮の2本と内宮の2本それぞれが、内宮に入る手前に架かっている宇治橋の外側と内側の鳥居の2本柱に再利用されるのである。そうしてさらに20年たつと、外側の鳥居は桑名の七里の渡しに、内側の鳥居は亀山市にある関の追分けに移設されて、新たに20年間再利用される。こうして、まさに60年間すなわち還暦で、その役割を終えることになるのである。ここには「循環」の思想、リサイクルといった今後の環境問題におけるキーワードともいえるべき、「持続可能性」を考えるヒントが多く含まれている。

## 1. 世界史とヒューマニズム

私は、今から40年近くにも遡る自分の高等学校の世界史担当教員の経験をふりかえると、「ヒューマニズム」といえば直ちにルネサンスを思い出ししてしまう。すなわち、それまでのカトリック教会の権威のもとにあった中世社会の人々の生き方と違って、ルネサンスでは現世に生きる楽しみや、理性・感情の活動が重視された。神の束縛からの人間の解放という意味で、人間性の尊重・人間の自意識の覚醒を本質とするものがヒューマニズムである、と説明していた。訳としては「人文主義」や「人間主義」をあてていた。真の意味での「人間中心主義」とまでは思いが及んでいなかった。ともかくもヒューマニズムといえば、プラスの意

味でしか理解していなかったのである。そしてヒューマニズムが初めて近代ヨーロッパに生まれたとする、ヨーロッパ中心史観が私の中にもあったことは事実である。

ところがその後、環境問題とりわけ森林破壊に着目して研究を進めると、このヒューマニズムにこそ問題があるのではないかと考えるに至ったのである。

そのひとつの大きなきっかけは、平成6年に本学を退任された山本宏教授の講演「ヒューマニズムの反省—A・シュヴァイツァーにちなんで—」であった。実に奥深い議論が展開されているが、かいつまんでいえば以下の如くである<sup>(2)</sup>。

ヒューマニズムが貫徹しているヨーロッパにおいて、第2次世界大戦によるユダヤ人虐殺のようなことがなぜ起きたのか。アウシュヴィッツの犯罪はこのヒューマニズム文明にその根拠があるのではないのか。こう考えて真摯な反省を行ったのがシュヴァイツァーであった。宇宙には人間以外に動物もあれば、植物も、さらには土や水や空気や天体のような物体もある。その中でヒューマニズム文明はなぜに人間だけが尊いと考えるのだろうか。彼は、ヒューマニズム文明の旗手、デカルトやパスカルに従って、人間の尊厳の根拠は思考にあるというように反省の歩を進める。人間以外の物は思考を持たない。人間だけが思考によって文化を創造する。それ故に、人間は万物の中で最も尊い存在であるというのがヒューマニズム文明の本質をなしていると、分析する。

しかしながら、人間の尊厳が厳密な方法論に基づく思考にあるとすれば、そうでない人間、あるいは別の方法に基づいて思考する人間は、ヒューマニズム文明の中に生活するヨーロッパ人にとっては、人間の尊厳性を保持しているとは考えられなくなるのは当然の帰結である。したがって黒人や有色人種は、白人と同等の尊厳性を保持するとは考えられなくなる。このように、ヒューマニズム文明はその本質に、人種差別の芽を宿している。これがシュヴァイツァーの自己反省であった。

だが彼は、反省をさらに深化させる。すなわち、同じ白人でも、それほど厳密な方法論に基づく内面的思考を得意とせず、むしろ、感覚的な外面性

に重心を置く種族があると考えられる。すなわち南方系のラテン民族である。かくしてヒューマニズム文明は、白人の中でもラテン系を人間における中心的位置から排除しようとする。結果として、北方系のゲルマン民族に人間の尊厳性が収斂していったのがナチズムであったと、シュヴァイツァーは同じドイツ人として反省を集約し、ここに第2次世界大戦の遠因を見たのであった。このような考察から彼は、人間中心主義に代わる生命中心主義の倫理を、新しい文明の土台としなければならないと考え、「生命に対する畏敬」の思想を展開する。

しかし山本氏は、このシュヴァイツァーの批判・反省が不徹底だったという。なぜならこの宇宙にある物を3つに分類すれば、人間と生物と物体であるが、彼は3つ目の生命のない物に対しては、尊厳性の外においている。その意味で彼の「生命に対する畏敬」には、まだ差別の芽が残っているからである。

ところで、山本氏はニーチェの指摘をうけながら、実は西洋文明は近代に入ってからヒューマニズムの文明になったのではなく、ソクラテスからそのような文明の芽が出ているという。もちろんキリスト教もヒューマニズムだという。そうすると、ルネサンスにおいてキリスト教から解放されてヒューマニズムが出てきたという、これまでの世界史の一般認識は、改められなければならないのではないだろうか、と私は思う。山本氏はさらに続ける。2000年も西洋人はヒューマニズムの文明の中に生きてきた者とすれば、彼らの人間中心主義は骨の髄までしみ渡り、生活のすみずみまで行きわたっていると考えられる。先の人間・生物・物体の3者を2つにまとめれば生物・物体は「自然」となり、人間中心主義を本質とするヒューマニズムの文明は、当然「自然」と対決する。西洋における自然科学の成立は、自然を人間に奉仕させようとする考え方の結果であり、人間の思考すなわち知は、自然征服のための力になる。それに対して、東洋文明特に日本の文明は、人間も自然の一部と考えるもので、人類の将来を切り開く指導原理となるべきものがある。こうしたナチュラルイズム文明こそを、今後は重要視していく必要

がある、と。

以上、山本氏の主張を足早に見てきたが、ヒューマニズムの貫徹した西洋においてこそ、自然破壊が著しい理由の一端が明らかになったことと思う。

## 2. ハイデッガーとヒューマニズム

ところで、山本氏は触れていないが、その後先学の諸業績を検討するうちに、ここで論じている問題の本質を鋭くえぐり出しているのが、ハイデッガーであることを知った。すなわち、彼は、人間の観念、人間の意志を基礎にして自然を処理し、自然を征服しようとする人間中心の観念論を心から憎み、近代の科学技術が人間を大地から引きぬいて、根無し草にしてしまったことを憂えたのである<sup>(3)</sup>。別の言い方をすれば、近代技術は自然に対する「強要」という形をとっており、農業も鉱業も工業もすべて自然を強要し、それを役立つものとして取り立てるということで成り立っている。そして人間は取り立てるものとしての自分を、地上の主人と思いこんでいるのである<sup>(4)</sup>。そもそもハイデッガーは、西洋＝ヨーロッパの命運を規定した〈哲学〉と呼ばれる知が、自然を超えた超自然的原理を設定して自然からの離脱をはかり、自然を制作のための単なる材料におとしめる、反自然的な知なのだ<sup>(5)</sup>と考えた。

しかし、このようにヨーロッパ哲学を厳しく批判するハイデッガーの哲学ですら、梅原猛氏は、現代文明の危機を乗り越える思想にはなりえないという。なぜなら、自分の初期の著作が、西洋哲学の伝統である人間中心主義あるいは「ヒューマニズム」に浸透されていると反省した後期においても<sup>(6)</sup>、ハイデッガーは言葉を重視し、言葉は人間だけのものと認識するところに一種の人間中心主義が存在していると思わざるを得ないという。そして環境に即して考えれば、ハイデッガーは古代ギリシャそれもソクラテス以前の哲学者達を重要視するのであるが、当のギリシャにおいて、すでにプラトンの時代に自然破壊が始まり、キリスト教になってそれが決定的となったのであって、その自然破壊の運命をどうしてハイデッガーは見なかったのかと、梅原氏は問うのである<sup>(7)</sup>。



なかなか鋭い指摘であると思うが、さらに私は、後期ハイデッガーの思想を代表する『「ヒューマニズム」について』を読み、次のように考える。本文はもちろんのことながら、訳者渡邊二郎氏の解説や訳注がきわめて示唆に富んでおり、それをも参照しながら見ていきたい。

ハイデッガーは周知のように「存在」を根源から問う。すなわち、これまでの哲学は「存在の真理」を問わず、せいぜい「存在者」をその「存在」において問うに過ぎなかった。それは、プラトン以来の長い来歴を持つ「主観性の形而上学」であり、ついには「世界の運命」としての「故郷喪失」を帰結させるゆえんのものである。そこでは人間は「理性的動物」と捉えられ、思考や言語もそれに則って解釈され、すべては人間を存在者の「主人公」に祭り上げる。そこでは人間の活動を介しての「文明と文化」の進展のみがもっぱら目指される。そしてその計算的支配の結果、今や技術による「巨大一収奪機構」の危険が迫ってきているという<sup>(8)</sup>。最後のところは、最初に述べた自然に対する「強要」と結びつき、自然破壊の問題につながる。

以上のことを私流にまとめれば、「ヒューマニズム」→「存在忘却」→「故郷喪失」こそが自然破壊の根本原因なのではないか。そしてハイデッガーは、それをよく見抜いていたのではないかと思う。それでは、この近代的人間の「故郷喪失」を超克するためには、一体どうすればよいのであろうか。それは本来の人間のあり方に戻ることである。すなわち、もともと人間は「存在」の投げによって、「存在」の開けた明るみの中に「存在」へと身を開き—そこへ出で立つ者として住むのであるから、そのような住み方を学び直す必要があるのである<sup>(9)</sup>。

ハイデッガーはこう説くのであるが、私はこの「開けた明るみ」という内実が、非常に気にかかる。ここからは全く私の仮説であるが、この「明るみ」は、キリスト教の光による明るさではなかろうか。梅原氏も言うように、確かにハイデッガーにはキリスト教への信仰はほとんど無い。しかし、次の文を読めばやはり彼も、西洋のキリスト教文明に培われた子であると思われる。すなわち

「人間は救済史的に『神の子』として、人間なのであり、その『神の子』は、父が語りかけてくる要求を、キリストのうちに聴き取り、その要求を背負うのである」と<sup>(10)</sup>。訳者渡邊氏はこの点について、「『存在』が『語りかけてくる要求』に聴従するハイデッガーの思索は、『父』なる神が『語りかけてくる要求』を救い主イエスのうちに聴き取ってこれに従うキリスト教的宗教の構造と、根本的に相通ずるものをもつ」と指摘していることは<sup>(11)</sup>、きわめて興味深い。

そして、梅原氏もキリスト教になって自然破壊が決定的となったと述べていたが、野生植物およびそれを生やしている森に対する敵視は、とりわけキリスト教のもとにおいて顕著であり、アウグスチヌスなどは、そうした森を悪魔の住み家だときめつけていたようである。森林の開拓を英語でclearingというが、これは文字通り真っ暗であったところを明るくするということである。古代ヨーロッパにおける森の開拓の度合いは、ローマ帝国の最盛期において最高潮に達したようであるが、ローマ帝国が分裂し衰退するにつれてまた森は復活してくる。それが中世の時代で、しばしば暗黒時代dark ageと呼ばれるが、文字通りうす暗い森に覆われていた時代であった。この闇を取っ払った時代が最初に述べた啓蒙時代なのである。それ故最初に見たenlightenmentには、やはり暗い森を切り開いて明るくするという意味がこめられているのである<sup>(12)</sup>。

渡邊氏によれば、ハイデッガーのいう「開けた明るみ」に使われているドイツ語は動詞lichtenで、その名詞はLichtungであるが、通常それは「森の中の木々を伐採されて開かれた空所」の意であるとされている<sup>(13)</sup>。全く興味深い指摘で、まさしくハイデッガーの思想の根底には、キリスト教から由来する「光」と、そこから派生する「啓蒙の光」が内包され、森林破壊を容認するものとなってしまっているのではなかろうか<sup>(14)</sup>。それ故先の梅原氏のいう言葉の問題とは違った意味で、そのような思想は、現在文明の危機を乗り越えるものとはなりえないのではないかと考えるのである。

### 3. ヒューマニズムとアニミズム

ところで、伊勢神宮内宮へ入ると、鬱蒼たる森林がある（といっても1959年の伊勢湾台風以前にはもっとすごかったそうであるが）。近年巨木がパワースポットとなって、触れたりしがみついたりする観光客の姿がよく見られる。こうした巨木なり大きな岩なりを崇拜する心情は、今の日本人にも見られるものであるが、まさしくこれはアニミズム的心情といってよいものである。

ところが、私はかつては、このアニミズムを未開人の宗教であると誤解していた。岩田慶治氏は、これは人類学における進化主義の風潮（アニミズム→シャーマニズム→民族宗教〈多神教〉→世界宗教〈一神教〉）に災いされて、きわめて表面的に未開と文明を区別してしまった結果だという。そして高度宗教に対するときには、その人自身が発心修業し、座禅瞑想してその世界の内部に入ろうとするのであるが、アニミズムの場合だけ、いとも簡単に「あの川にカミがいるとかれらは知っているが、そんなことは未開人の誤解さ」といって、自らそのなかに参入しようとはしないのである。こうして未開人と一緒にアニミズムが切り捨てられてしまったという<sup>(15)</sup>。

いわれてみれば全くそうで、かつて私が高校の教員の時も、アニミズムをトーテミズムやシャーマニズムとともに、「原始社会の宗教」として教えていたことを反省する。岩田氏は、アニミズムと呼ばれる信仰のなかに、はっきりしない部分、あいまいな点が多々あることは事実としながらも、一般にアニミズムという言葉で理解されていることを以下のごとく挙げている<sup>(16)</sup>。

アニミズムは万物のなかに魂（靈魂）がひそんでいることを信じ、その魂の存在を畏敬することから発展した宗教である。われわれの生活の場をとりまくすべてのものは魂をもっている。草木にも、鳥けものにも、石や水や風にも、魂がひそんでいる。したがってそれらは単なるモノではなくて、魂をもった存在なのだ。だからそれらのモノは、魂をもつことにおいて人間と同等のものであり、そ

の意味で互いに尊敬しあい、怖れと親しみをもってつきあっていかなければならない。わが国の古典にしるされているように、「草木ことごとく皆物言う」というのは古代人のアニミズム信仰の表現であるが、それは同時に今日の地球時代に生きる人びとの信仰でなくてはならない。それは自然と共に生きる、共生の思想、その根柢なのである。

それは今日的であり、かつ、未来を指向する宗教といわなければならない。

岩田氏はさらに詳しく分析をするが、私にとっては当面これで十分である。このアニミズムこそ、ヒューマニズムに対抗できる思想（これをはっきりにした思想といえるかどうかはべつとしても）として、捉え直す必要があるのではないか。日本人の精神構造の根底には神道があり、またその神道の中核には1万年以上も続いた縄文時代のアニミズムが引き継がれていると私は考えている。先の山本氏が神道に象徴的に表れているような自然主義、ナチュラリズムを強調するのも、同様の視点からであろう<sup>(17)</sup>。

他方、梅原氏は、「草木国土悉皆成仏」という言葉で表現される天台本覚思想こそ、西洋近代の行き詰まりを解決し、新しい人類の指針になるような思想であると主張する。もとより氏も、日本の基層文化を縄文と捉えており、それが源流となってこの天台の思想を生み出したと考えている<sup>(18)</sup>。しかしそうは言っても梅原氏は仏教の方に比重がある。私は、基層である神道の方に重点を置きたいのである。

### 4. ヒューマニズムの時間感覚と「開発」

ここに載せた2つの挿絵をご覧いただきたい。これはミヒャエル・エンデが『モモ』のなかで自分で描いたものである<sup>(19)</sup>。以前にもこの絵を分析したが<sup>(20)</sup>、おそらくエンデの意図したところとは違った私流の解釈ではあろうが、どうしても次に述べるような内容を持った絵に思えるのである。最初の絵は、古代ローマを思わせる円形劇場の廃墟がある。そこで人びとはのんびり暮らしていた



〈出典〉ミヒャエル・エンデ『モモ』岩波書店, 1976年, 10頁.



〈出典〉同上, 74頁.

が、ある時、時間貯蓄銀行から派遣された灰色の男たちが、時間を盗む計画を持って忍び寄ってくる。そして人びとが時間を無駄遣いしていることを説き、その節約を勧める。出された計算があまりに説得的なので、「ああ、もっとはやくから節約を始めなかったなんて、私はなんとという不幸な男だろう」と叫び、人びとは躍起になって時間を節約しようとする。私は、この灰色の男たちにマックス・ウェーバーのいう「資本主義の精神」を見るが、ともかくもその結果として、人びとの生活は日ごとに貧しくなり、日ごとに画一的になり、人間関係も日ごとに冷たくなり、とげとげしくなってしまった。

さらに大都会の大きな工場や会社の職場には、「時間は貴重だーむだにするな!」「時は金なりー節約せよ!」という標語がいたるところに掲げている。そして旧市街の家々は取り壊されて、まるっきり見分けのつかない、同じ形の高層住宅が、見渡す限りえんえんと連なる。まさに表題の「開発」である。これが2つ目の絵である。すなわち、「開発」の根底は、木を切ることなのである。

さて、改めてこの2つの絵を比べてみると、最初の絵では、松の木がたくさんあり、おそらく空も青いであろう。2つ目の絵には木が全くなく、空もどんよりとしている。これは「はじめに」で触れた円環的時間が支配的だったところへ、直線的时间が入り込んだ結果を見事に示していると考えられる。よく見るとそれぞれの象徴として、円形と直線がしっかりと描かれている。かつて、「社会が円環的時間から直線的时间に転換するとき、木を切るようになる」という仮説を提示した<sup>(21)</sup>。今、本稿との関連でいえば、これはそれがなかった社会に、「ヒューマニズム」が入った結果と考えてよいのではなかろうか。すなわち、ヒューマニズムとはその本質に、直線的时间感覚を持つものといえるのではないであろうか（それゆえアニミズムは円環的時間感覚）。したがって、灰色の男たちはヒューマニズム精神を持った人たちといえる。『モモ』に示された灰色の人々にはいわゆる人間味はなく、非情で計算高い人たちなのである。ヒューマニズムとはそのようなものなのである。ところが、これまで我々は1つ目の絵をヒューマ



ニズムの象徴のように思っただけであらうか。この2つ目の絵は「開発」の様相を見事に象徴していると言えよう<sup>(22)</sup>。

ここで最初に論じた遷宮にもどれば、日本文化の中枢において20年ごとの円環的時間を示していることは、そこにはなおいうところのヒューマニズムは入り込んでおらず、それゆえに広大な神宮林は守られており、さらに大きく言えば、世界でもまれな国土の3分の2がなおかつ森でおおわれていることも、それと深くかかわっているからなのではなからうか<sup>(23)</sup>。

## おわりに

世界史を環境から考えるという課題を持ち、しかも自分の住む伊勢から環境に関わる何かを発信したいと思っていた。そこで、前々からルネサンスのヒューマニズムのなかに、自然破壊の要因が潜んでいるのではないかと考えていたので、それを深く洞察していたハイデッガーのヒューマニズム論を批判的に検討してみた。実際にはルネサンスをはるかにさかのぼるところに、ヒューマニズムの根源があったこともわかった。

しかし、いざ書き始めると、歴史というよりも哲学に近い内容になってしまったことを反省している次第である。それでも、本文から環境世界史の本質を嗅ぎ取っていただければありがたいと思っている。(キリスト教の光→)ヒューマニズム→啓蒙思想→「開発」を、これまでの世界史ではおおよそプラスのものとして容認してきたが、それは著しい環境破壊、自然破壊をとまなうものとして、特にその思想の中核にある「ヒューマニズム」を早急に、総体的に再検討しなければならない時期に来ているのではないだろうか。

- (1) 小堀邦夫『伊勢神宮のこころ、式年遷宮の意味』淡交社、2011年、164頁以下。
- (2) 山本宏『ヒューマニズムの反省—A・シュヴァイツァーにちなんで—』皇學館大学出版部、1994年。
- (3) 山下正男『植物と哲学』中公新書、1977年、172頁。

- (4) 新井恵雄『ハイデッガー』清水書院、1970年、177～178頁。
- (5) 木田 元『ハイデッガーの思想』岩波新書、1993年、158頁。なお、このような観点からみて興味深いのは、ツゲという木の英名で、boxであり、この木の材が箱を作るのに適しているから、こう名づけられたのである。山口裕文他編『「中尾佐助 照葉樹林文化論」の展開』北海道大学出版会、2016年、394頁。もう1つ、木を意味するポルトガル語の madeira という単語は、ラテン語の materia すなわち「材料」を意味する単語から派生しており、やはり木自体が人間のために役立つものと観念されている。この点については、フロイトの興味深い指摘を参照。同『精神分析入門』河出書房、1956年、116～117頁。
- (6) ジョイ・A・パルマー編（須藤自由児訳）『環境の思想家たち』（下）みすず書房、2004年、60～61頁。同じ箇所では著者（サイモン・P・ジェームズ）は、ハイデッガーの主張として、ヒューマニズムの「伝統が、現代の自然からの『技術的』疎外の根底に横たわっている」としている。
- (7) 梅原猛『人類哲学序説』岩波新書、2013年、114～120頁。
- (8) M・ハイデッガー（渡邊二郎訳）『「ヒューマニズム」について』ちくま学芸文庫、1997年の訳者「解説」390頁。山下氏も、「人間中心主義」が、工業段階に入って科学技術という武器を手にするによって、装いを新たにし、それが、環境汚染、環境破壊を引き起こす「思想的張本人」となると指摘する。山下、前掲書、192頁。
- (9) 同、本文75～77頁。
- (10) 同、31頁。
- (11) 同、訳注240頁。
- (12) 山下、前掲書、74～75頁。なお、キリスト教と自然征服とのつながりを最も厳しく批判するのは、周知のようにリン・ホワイトであるが、彼の次の指摘に注意したい。「近代的な西洋科学はキリスト教神学の母体の

なかで鑄造されたのである。…科学と技術が一緒になり、多くの生態学上の結果から判断して、抑制のきかなくなる力を人類に与えたのであった。もしそうなら、キリスト教はとてつもない罪の重荷を負っているのである。…キリスト教徒にとっては一本の木は物理的事実以上のなにものもでもありえない。神聖な森という考えそのものがキリスト教に無縁のものであり、西洋のエトスに無縁のものである。二千年近くもの間、キリストの伝道師は神聖な森を伐り倒してきた。それは自然に精神を前提するゆえ、偶像崇拜になるのであった。」リン・ホワイト（青木靖三訳）『機械と神』みすず書房1999年、91～92頁。もう1つ、レヴィ＝ストロースの講演から教わったことであるが、ヨーロッパで古くから用いられてきた「ソヴァージュ（野蛮）」savageという言葉は、「森の」という意味の形容詞ということであるが（『現代世界と人類学』サイマル出版会、1988年、117頁）、そうだとすれば、「野蛮」を克服しようとする「文明」が、「野蛮」の象徴としての森を切ることは、当然のことと思えてくる。

- (13) ハイデッガー、前掲書、訳注248頁。
- (14) 私は、この「啓蒙の光」を「啓蒙的偏見」と名付け、これが世界史を見る目をいかに歪めてしまっているかを痛感し、そこからの脱却を説いている一人である。拙著『社会科教育の国際化課題』国書刊行会、1995年。特にその第3章を参照されたい。
- (15) 岩田慶治『アニミズム時代』法蔵館、1993年、8頁。
- (16) 同、170～171頁。
- (17) 山本、前掲書、34頁以下。なお、わが国の「自然崇拜」は、アニミズム理論で指摘される宗教性とは全く別種の宗教性を持つものである故に、キリスト教が周知する最も

価値の低い、最下等のあり方をしている宗教形態としてのアニミズムといった軽蔑的呼称は拒否しなければならないとの、保坂氏の主張は重要であり、じっくりと検討せねばならないと考えている。保坂幸博『日本の自然崇拜、西洋のアニミズム』新評論、2003年。特に「はじめに」の問題意識は強烈である。

- (18) 梅原、前掲書、11～15、19～23頁。
- (19) ミヒヤエル・エンデ（大島かおり訳）『モモ』岩波書店、1976年、10、74頁。
- (20) 拙稿「ミヒヤエル・エンデが『モモ』で訴えたかったこと—その挿絵の解釈—」『皇學館大学教育学部研究報告集』第2号、2010年。本稿は、その後次の拙著に収録される。『グローバル世界史と環境世界史』青山社、2016年、第5章。
- (21) 拙著『環境世界史学序説』国書刊行会、2001年、118頁。
- (22) このことを歴史上最もよく示しているのが、アメリカ大陸の状況ではなからうか。円環的時間をもち、森を守っていたインディアン社会に、ヨーロッパ人が直線的时间を持ち込んだ結果として、大量に森が破壊されたことについては、前掲拙稿「ミヒヤエル・エンデ」37～39頁や、やや考察の観点は違うが、前掲拙著『環境世界史学序説』70、116～117頁、を参照。
- (23) 植物ではなく動物（生類）についてはあるが、渡辺京二氏は江戸時代の人びとには「『ヒューマニズム』はまだ発見されていなかった」という興味深い指摘をし、「徳川期の日本人は人間をそれほどありがたいもの、万物の上に君臨するものとは思ってはいなかった」と述べる。同『逝きし世の面影』平凡社ライブラリー、2005年、504～505頁。この感覚は、現代の日本人にも引き継がれているものであろう。



## Environment, Development, and World History: As Seen via a Re-examination of *Humanism*

Masahiro FUKAKUSA

When thinking about world history from an environmental point of view, the Regular Shrine Removal of my local Ise Jingu Shrine provides a clue. In particular, the Shrine Transfer Ceremonies which are carried out at midnight causes me to consider the deeper meanings of darkness and prompts me to assume that the modern age was an era which tried to suppress this darkness. Furthermore, it seems that there is also a profound significance attached to the shrine removal conducted every 20 years.

The essence of the Renaissance is said to lie in Humanism. In the development of world history, the Humanism was highly valued as a means of emancipation for the elements of humanity unfairly shackled by prescriptive and dogmatic notions of God in the medieval era, and hence was regarded as being directly linked to the development of the consciousness of the modern era. But, if we consider it from another viewpoint, this is a highly anthropocentric attitude which implies the idea of conquering and subduing nature. Heidegger strongly criticized such aspects of humanism and advocated returning to the way the human beings are meant to be originally. However, this Heidegger's philosophy contains several key elements of Christianity which also have a humanistic thinking at their roots, and as such, it is not an adequate critique of Humanism as a general modality of thought. Indeed, it is conceivable that the severe destruction of some forests in Europe was caused by the following chain of ideas: the light of Christ → humanism → philosophy of enlightenment → "development."

In this paper, I will consider the measures to conserve the natural environment for the future not only by examining humanistic philosophies and specifically Heidegger's philosophy but also by looking at animism and senses of time as a means to break the above chain.

**Keywords:** development, humanism, Heidegger, philosophy of enlightenment, animism, sense of time